

---

# 運命ってこうゆうこと

叶夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命ってこうゆーこと

### 【Nコード】

N2138Z

### 【作者名】

叶夢

### 【あらすじ】

これは本当の話

オンラインでのこの行動は許されることではない  
しかしあの人に出会ってそんなのどうだってよかった

あたしの日記をもとに書いたモンスターハンター物語…

## プロローグ

あなたは心にしまっておかないといけない恋ってしたことありますか？

その恋って…

切なくて

苦しくて

つらくて

それでも

甘酸っぱくて

愛おしくて

恋しくて

だからこそ恋がしたくなる

だからこそ

会いたい気持ちでいっぱいになる

だからこそ

自分の気持ちをさらけ出したくなる

今まで恋をしたことがないひと  
恋をしてもうまくいかないひと

それは怖いだけ  
恋をして傷つくのが怖いの

その気持ちは無駄じゃない

遠距離恋愛より切なくて  
近距離恋愛より深い

ユウの恋物語…

## 出会い

「うわぁ！」

モンスターハンターtry

兄貴に勧められてやり始めたゲーム

今日街って言うオンラインゲームに取り組もうとしていた

兄貴にはするなと言われていたけど、最近は兄貴に対して反抗期の  
あたし、ユウ

武器の使い方、チャットの仕方は兄貴から技を盗んで勉強してた

「タイプ…?」

さっそく壁

自由タイプ、新人タイプ、達人タイプに求人タイプ

「なにそれ…」

なんとなく選んでしまった求人タイプ

この行動が運命の道筋だったとは…

『こんにちは』

何も知らないあたしはテキストに進めていった

『こんにちは！君HR1だね…』

このゲームにはHRと言ってランクが付けられていた

『正直迷惑だと思うから移動した方がいい』

『すみません…何も分からなくて…』

『とりあえず新人タイプに行ったら？』

『はい…ありがとうございます』

いわれるがまま行動してみる

『こんにちは』

人がたくさんいる街を選んだ

『こんにちは』

『こんにちは』

『HR1かよ』

『すみません…初心者なので…』

また新しいひとが来る

『こんにちは！』

『こんにちは』

『移動できたんだね、よかった』

「なんのこと？」

『よかつたら一緒に育てるか？ケイトさん』

『本当ですか？お願いします』

『俺はREON。レオンって読むから』

『はい！あたしKEIT。ケイトです』  
『行きますか？』

他のハンターからクエストの誘い

『あ、やめときます』

『あたしも…』

『了解しました』

街は急に静まり返った

『じゃあとりあえず武器の扱い』

『はい』

そう言ってチケットのクエに行った

『スラッシュアクセス。剣と斧になる武器』

『お願いします』

そこからずっとずうっと教えてもらってた

『そろそろ時間だから帰ろっか』

『はい』

『だいぶ上達したと思うよ』

『ありがとうございます』

『あしたも来ていいか？』

『もちろんです！お願いします』

オンラインの怖さってのを知らないあたしは何も考えず承諾  
クエから帰ると誰一人いなかった

『じゃ』

『はい』

『さようなら〜』

『さようなら!』

ここからあたしの恋物語が始まった…

きゅん

『だいぶ上手くなったね』

『ありがとうございます』

『じゃあそろそろモンスター狩りにでも行くか？』

『え！いいんですか？』

『もちろん。慣れないとずっとできないからね』

教え方が上手いレオンさんに連れられて何回目かのジャギイ狩りに行った

レオンさんに会って約一週間

『おねがいします』

『よろしくお願いします』

そんな感じではじまった

「あ…まあ取られてる…」

兄貴が帰って来る

「お先」

「そこは剣やろ！なんでやねん！」

「あ！」

コントローラーを奪われる

《狩猟が成功しました》

「あ……」

「あ……終わった……」

「兄貴！なんちゆうことを！」

「ってか、またこの人とやってんの？ダチ？」

「いや、モンハンの先輩」

「そんなすぐ信用したらあかんで」

兄貴の言葉にドキツとする

「オンラインは顔もなんも分からんし……だいたいその人だって画面の前で『女の子やあ』」

「ってニヤついてるかもしれんで？」

「別にあわへんからいいんちゃうん」

「ばか！そうゆう問題ちゃうわ！」

『おつかれさま！……なんか後半すごく上手かったね』

『おつかれさまでした！兄貴に奪われて……』

「おいユウ！それも個人情報」

「大丈夫やって……」

『そうなんだ、ケイトさんもすぐそうなれるよ』

『ありがとうございます』

「ユウ、もし武器当たったら謝らないと礼儀知らずって思われるからな」

「分かった〜」

重そうな荷物を抱えてテレビの前を離れる兄貴

『もう一回行く?』

『お願いします!』

『はい』

兄貴にいわれたことを胸にまた同じクエをする

『お願いします』

『よろしくお願いします』

ずんずん進んでゆく

『どこかな?』

『いないですね』

二回目はなかなか見つからなかった

『千里眼持つてる?』

『なんですかそれ』

『それを使うとどこにいるか分かるんだ』

『もってまうですね』

打ち間違い…

『まってまうですねw』

『間違えました…』

『かわいいw』

「…え…」

かわいいなんて言われるの何日ぶりだろう…  
兄貴の言葉がちょっと不安を襲う

「あ！」

やっと見つけたモンスター

武器を出したその瞬間、レオンさんが前を走った

『ごめんなさい』

『気にするな』

きゅん

いやいやいや！…なにさっきのきゅんは！

そんなことを考えつつ…

《狩猟が成功しました》

『おつかれさまでした』

『おつかれさま』

きゅん ってなに…？

『俺時間だから落ちます』

『はい！ありがとうございます』

『おつかれさま』

『おつかれさまですー！』

レオンさんが出てから1人になった

…何歳なんかな…どこの人なんかな…どんな顔なんかな…  
…どんな声なんかな…中学生なんかな…？

いろんな疑問が浮かび上がる

もしかして…

もしかすると…

オンラインゲームで…

恋…？

んなわけない！！

と、自問自答しながらその場を出た

## 愛と恐怖

「はやく家帰りたいい…」

そのときあたしは小学生で、学校でダダこねてた

「なんでそんな帰りたいん？」

「はよゲームしたい」

そのとき仲の良かったまりちゃんにはすべてを言っていた

「ああ、レオンさん？」

「そお！もうはよ会いたい」

「それまずくない？恋愛感情入ってる」

「それでもいいかあ…」

「ええ！危なくない？」

「大丈夫」

でもそのときあたしにはクラスに好きなひとがいた

「ユウ！」

「んあ?!」

その人は親友にも近い存在で相談とかいっぱいやり合ってた

でも…

最近優先順位が逆になってた

レオンさんがいいから一緒の班じゃなくていいやとか  
レオンさんがいいからあの子の側にいなくていいやとか  
正直その子のことよりレオンさんのことで頭いっぱいだったし

「やつふうー!」

やっと一日を終えて直テレビの前へ

「ただいまぐらい言いなさい!」

「だだい?あゝ」

「あ、今日出かけるから」

「え……」

「兄ちゃんの病院行ってそっから晩ご飯食べるから」

「残ったらあかんの?」

「だから!わからずややなあ……晩ご飯食べるって言ってるやろ?」

早くしたいのにい……

そんなこんなで薄暗い病院行って帰って来たのは20時

一生懸命おねだりして、一時間の約束で始めた

『こんにちは!』

って言っても誰もいない

来おへんのかなあゝって思ってたら

『こんにちは!ってかこんばんは!』

『こんばんは!来ないかと思ってきました……』

『来るよ 来ない方がよかった?』  
『そんなわけないです!』  
『よかった』

来てほしかったって分かってるくせに…

つて…あたしマジで本気で好きになっちゃってるかも!!!

『今日一時間しかできないです』  
『そっか、じゃあ今日は俺の部屋に案内しちゃおうかな』  
『部屋ですか』  
『ついて来て!』

そっいつて連れてこられたのはゲストハウスだった

『すごい!』  
『まだ上の階級があるんだけどね』  
『十分すごいですよ!』  
『テンション上がってるね』  
『はい!すごいです!』  
『クエ行きませんか?』  
『本当にかわいいw』

今頃だが、チャットには1人のハンターに対してメッセージを送ることが出来る( )【内に表記】

【かわいくないです。本当のあたしなんて】  
【見た目がすべてじゃないよ】  
【でも…】

『お〜い!!!ケイト毛糸ケイト!クエ行こうぜ!!!』

知らないやつからの誘い

【友達？】

【知らないです】

『行きたくないから…!』

『死ね!…!』

『なんて事言うんだよ!』

『正義のヒーローレオン登場!』

『ケイトさんに謝れ!』

『偽善者めがああ!…! W W W W』

『ひどい…!』

「何こいつ!…!」

『ケイトさん、出ようか』

『はい』

『にあげるんだあ!』

『しつこいな』

『2人で死ね』

そのまま2人でその場を離れた

## 確信

あそこからはなれて1人でジャギイ狩りへ行っただいぶ慣れたけどまだ食らう回数は多いまま

【こんにちは】

クエ中に届いたメッセージ

【こんにちは、今から戻りますね】

さっきのことでテンションがかなりさがってたあたしはクエを何も考えずに途中放棄

『お帰り』

『ただいまあ』

『クエできた?』

『やめてきました』

『本当放つとけないねw』

『すいません…』

『さっきは怖い思いさせてごめん』

『大丈夫です』

『気にするなよ、あんなやつ』

『はい…』

頬を伝った一粒の涙

レオンさんはあたしの気持ちを知ってる

中をすべて見透かされてるような気がして不思議な気持ちだった

『今日はどうする？できる？』

『…今日はやっぱり落ちます』

『そっかあ…じゃあまた明日』

レオンさんがアクションで手を振ってくれた

『さようなら！』

『またあした』

次の日、気持ちを切り替えてテレビの前に座る

「……………」

昨日みたいなひとに会いたくなくて、1人でいた

『早く来てよお…………』

返事が来ないのは分かってるけど…

『レオンさん』

独り言を言ってみる

『レオンさん……………ん……………早く会いたい……………早く会いたい……………』

メッセージ欄に荒らしのように増えていくあたしの名前

『レオンさんのことマジで好きだぁ!!!』  
『レオンさんに会いたい会いたい会いたい!!!』  
『レオンさ〜ん!!!』  
『こんにちは〜!』

「げ!!!」

なんてタイミングで…

『?!!』

『ああ!何でもないです!』

『本当にい?w』

『…正直寂しかったですw』

『ちゃんと来たから』

びっくりしたぁ…

…あたしが好きって分かつちゃった?

『今日はクエを進めていこうか』

『はい!』

そっから2人で虫取りに行った

『あ…』

『どうかした?』

『…虫網……忘れました』

何の意味があるんだよ!

『…気をつけて…』

そのまんまクエをやめた

『本当すいませんでした…』

『今度からは気をつけてね』

『はい…』

『そうゆう所がかわいいw』

この間違い、実は今まで何回もやったのに…

『今度こそ嫌われると思いました』

『そんなことないよ』

「はあ…」

ほっとしてため息が出る

『今度こそ持った？w』

『はい！』

『じゃあ行こっか』

『はい！』

あたしは幸せだ

好きなひととこうやって側にいられるから

ま…オンラインだけどね

## 積極的

『そろそろ新しい装備作るっか』

そんなレオンさんのひと言で、リオレイアの装備を作ることになった最初は手こずってたジャギイも、レオンさんのおかげで慣れちゃってレイアはジャギイよりだいぶ強いから、今猛特訓中

『後は逆鱗だけだね』

『はい！』

『ケイトさん、だいぶ育ったね』

『レオンさんのおかげです！』

レオンさんの指導のおかげで今あたしはHR28。あと2上がったら上級に行ける

そのときレオンさんはもう上級に行ける30に達していた自意識過剰かもしれないけど、あたしが30に上がるのを待っててくれてるみたいに見える不安だった

『あの、聞いてもいいですか？』

『ん？』

『こんにちは！』

他のハンターさんがやって来る

『こんにちは』

『こんにちは！』

【で、聞きたいことって？】

【どうしてレオンさんはあたしにこんなに尽くしてくれているんですか？】

【なんか放つとけないんだよ】

【本当は上位に上がりたいんじゃない…】

【俺もいろんな武器の練習してきたしね】

『クエ行きませんか？』

気…使っていないのかな？

【そろそろレイア行く？】

【はい！】

まだ子供のあたしには分からなかった

彼が上位に上がるのを進めて背中を押すか

一緒にいたいってただこねるか

どっちがいいかなんて理解できない分からない

そんな気持ちで行ったレイアの逆鱗探し

『よろしくお願いします』

『よろしくお願いします！』

草の上、水の上を駆け回る

『いたよ』

『はい！』

武器の使い方もバカの一つ覚えで、ほとんどスラッシュユアックスか

太刀

《狩りが成功しました》

『おつかれさまでした』

『おつかれさまでした!』

最後の一分間、レイアのしっぽを調べる

《逆鱗が見つかりました》

「!!!!!!!!!!!!!!」

きた~~~~~~~~!!!!!!

やっと来た!逆鱗!すごい!やったあ!

『逆鱗出ました!!!!』

『本当に!?!おめでとう!』

『ありがとうございます!』

さっそく帰って装備作り

そしてできたパニエ風の装備

【できました!】

【……】

【どうかしました?】

【レイア装備のケイトさんお姫様みたいww】

ドキッ!!



『 W W W 』

【あぶなw】

【かわいすぎるww】

【かわいくないです！】

【守ってあげたくなくなっちゃうなあ】

なんか：今日のレオンさんはやけにあたしをほめて来る

なにになにに！！明日から会えないなんて無いよね??

そんな不安な明日が来た

今日は3月9日火曜日。

この日、あんな出来事が起こるなんて  
今まで全然予想してなかった



え？どつちどつち？なに？なにがなんだかわからないい…

【びっくりした？】

【だって…あたしもレオンさんのこと好きだから…】

あああ…冗談かもしれないのにそんな返信しちゃっていいの？

【じゃあ、ゲームの中の彼女になってくれますか？】

うそお…

【そっくりそのままお返しします】

うん、その返事のとにあれでしょ？冗談だよ！ってゆうんでしょ？  
レオンさ〜ん！エイプリルフルはまだですよ…

【2人で話したい。移動しないか？】

【はい！】

冗談です。は？言い忘れかw  
とことんひどいなあ…

と、鈍感なあたし

2人街をつくって、他のハンターさんが入れないようになった

『いつ頃から好きだった？』

…いつそ、ずっと騙されとこ

『えっと、どうしてそんなに尽くしてくれるのか聞いたでしょ？』

『うん』

『そのだいぶ前からずっと』

『俺はそのときケイトさんのこと放っとけなかった』

…本当の話？これ

今頃気づく鈍感なあたし

『俺らが初めて会ったときのこと覚えてる？』

『はつきりと！』

『何も知らない君が求人タイプに入って来て』

『うんうん…』

『俺たちが出会ってなければケイトさん分からなくて街にはいなか

ったかもね』

『ですね！』

あたし…本当に好きでいてもらってるの？

まだ疑ってる鈍感なあたし

『あらためて』

『ありがとっございます！…！』

「こつゆつことでしょ？w

って思ったら

『好きだよ』

本当なんだあ…！！！！！！

今までの言葉が真実だってわかってはしゃぐ





## 本音

告白されてからいくつかたった

いろんな壁も乗り越えていった

個人情報も…もらったこともあった

彼は…下の名前がケンって名前  
学生で関東のほうだって

あと…4月から忙しくて土日しか来れないって…  
さみしいよ！土日しかあえないなんて…  
そんな話をしたあと…

ついにあの話になった

『ケイトさん』

『はい』

『俺、そろそろ上位に行こうと思う』

「え…」

『頑張つて来てください！…！』

『…心配なんだけど』

『あたしは全然大丈夫ですよ!』

『上位…行かんとこつかな…』

『ほんとに、あたしなら大丈夫ですよ!』

『真剣に悩む』

『レオンさんはレオンさんの道を歩むのだ!!!』

勝手に出て来る偽りの言葉

よくさ、相手に幸せになつてほしいから手を離す。つて話があるで  
しょ?

あたしの尊敬してるひとがこう言つてた

「それは、相手のことを幸せにたくて、じゃなくて、自分が逃げ  
てるだけなんだ。情けないね。でも、好きなやつのためにそんだけ情  
けなくなれるつてのはすげえかつこいいことだよな」

そんな言葉が頭をよぎつた

だから多分…こんな本音じゃない言葉が出て来たんだ

あたしの本音?

それは…

離れたくない。一緒にいたい。もっと一緒にクエしたい。

もっともつと2人で幸せになりたい

ふたりで…話したい

『上位で待つてる…』

『はい!』

そういつて彼は消えた

心を置いたまま

やけになってやっと上位に行けるHRにあがった

『あたしも上位行きたいです!』

『本当に?』

『はい!レオンさんとクエしたいんです!』

『無理はしてないな?』

『はい!』

上位に行くためのクエを済ませて上位へ行った

やっと…やっとレオンさんと一緒にいれる…

それで喜んでたら…

『ケイトさん…』

『はい!』

『俺…ケイトさんのこと…好きだよ』

『レオンさん…w』

『ゲームの中の彼女は君しか考えられないよ』

『あたしもそうだよ』

あたし、もうゲームはしてないの  
でも彼との関係はずっと続いている  
連絡も取ってる

いくら遠くても何年経っても彼のことを忘れない

あたしたちが出会ったのって運命だから

運命はこの世から消えない。消せない。

運命ってこうゆうことなんだよ

偶然あって、偶然話して、偶然また会って。

いくつもの偶然が重なって運命に育つ

運命ってこうゆうこと…

## エピソード

怖かったんです

彼の気持ちはこれであってるのかって

間違ったこと書いてたら、ものすごく嫌だった

だからあんな中途半端な結果になってしまった

彼と付き合い始めていま一年半以上たちました

今でも続いています

彼はずっと相談や悩みを聞いてくれます

でも、やっぱり遠いんですよ。家が

だから会うことできない

でも、遠いからこそ続く愛ってあると思うんです

母がある日言いました

「そうゆう所で出会ったひとは優しいって言うけど、それは自分が欲しい言葉をくれるから優しいと感じるだけやねん。一回自分が相手突き放したら多分本性暴かれるでw」

そんなこと無い

先入観だらけ

会ったことが無いからそう言うだけ

最初はそう思ったけど、やっぱりなんか怖くなっちゃって

一回彼にあたしがあなたの思ってるようなひとじゃ無かったら？

って聞いたこと会ったんです

そしたら…僕は君を信じてるって言われちゃったよww

幸せだったなあ〜

信じられるってすごい幸せなことなんだね

彼はずっとあたしを信じてくれてる

だからあたしも彼を信じます

会えなくても信じます

ここまで読んでくれた方本当にありがとうございます  
それとごめんなさい

中途半端で終わらせてしまって

家族へ

今まで隠しててごめんね

個人情報とは絶対渡すなって言われ続けたけど裏切っちゃった  
罪悪感でいっぱいです

でも、あたし幸せですよ？

彼もきつと同じ気持ち

そうゆう考え方だから書くのが怖くなったんだってのww

そして彼へ

こんな結果にしてごめんなさい

迷ったの、続きを書くのが怖くなった

書きたいと言い出したのはあたしなのに

本当にごめんなさい

またどんどん書いていくから、どうぞよろしくお願いします！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2138z/>

---

運命ってこうゆうこと

2011年12月25日12時49分発行